

ネトゲ部

kaji0213

第一話「誰も部員がない部室」

ある名人は「ゲームは二時間」と言ったそうだが俺はそれに対して激しく同意できる。何事もほどほどがいいのだ。この言葉をぜひ俺の幼馴染みに贈りたい。

俺の幼馴染みの東リコは無類のゲーム好きだ。いや、好きだというレベルでは無いのかも知れない。止まってしまうと死んでしまうマグロのごとく、リコは起きてから寝るまで四六時中ゲームをする。授業中でも隠れて携帯ゲームをやるくらいだ。実に見事に机の下にゲーム機を隠してプレーする。リコは授業中にゲームをやっている癖に成績はととてもいい。いつもベストテンには入る。彼女が言うには聞いていれ授業の中身が入ってくるのだそうだ。なんて羨ましい。真面目に授業を受けても、彼女の足元にも及ばない俺は、どうしたらいいのだろうか。

「ねえ、弦人。何も言わずに付いて来て」

「嫌だ。面倒臭い」

前の方から、目付きの悪い黒髪の女が歩いて来ると思ったらリコだった。リコは目が悪い癖に眼鏡もコンタクトもしていないので、非常に目付きが悪い。知り合いで無かったら思わず道を譲ってしまう程のレベルだ。

「いいから早く！」

「な、なんだよ」

俺は有無を言わされずに、為す術無くリコに引っ張られて行った。

「おい。どこに行くんだよ」

「部室棟よ」

「部室棟だって。何しに行くんだよ」

「何しにって、行けばわかるわよ」

俺は本棟と部室棟の渡り廊下を渡らされ、部室棟へとやってきた。俺はこの学校に入ってから半年程になるが部活には入っていないので、部室棟へと来るのは久しぶりだ。前に来たときは、クラブ見学の時に何度か足を運んだくらいで、それからは一度も足を運んでいない。

ちなみに俺の通っている大東和高校五百人くらいの片田舎の学校で、田舎にしては結構な規模の学校だ。部活にも相当力を入れていて、体育会系、文化系問わずかなりの数のクラブが存在する。中には何をしているのかわからない意味不明のクラブまで存在していて、近年は生徒会で実績の無いクラブの仕分け作業が行われている。

「ここよ」

「はあ、はあ。何だって」

俺はリコに部室棟のある教室の前に連れていかれていた。『第二視聴覚室』と書かれている。ドアのガラスには『パソコン部』という張り紙が貼られていた。

「パソコン部？」

「そうよ。パソコン部よ。今から私たちはここに入部するのよ」

「……俺も？」

「そうよ」

「なんで？」

「なんでって言うまでもないでしょ」

やや演技がかった口調でリコは言った。このパソコン部という部に入るそう。誰が？ リコと俺がだそう。なんで言うまでも無いのだろうか。相変わらず意味がわからない。

「あ。ちなみにここはパソコン部だけどそんじょそこらのパソコン部とは違うから。何とね。ねえ、聞きたい？」

「あまり聞きたくは無いが、言ってみろ」

「ここはね。ネットゲームを専門にするクラブ、通称『ネトゲ部』なのよ」

「はあ？ ネットゲ部」

ネットゲームというと、パソコンでやる複数の人間と同時にゲームをするものだったはずだ。俺もリコに無理やりやらされているのでそのくらいは知っている。そんな部活が会ったなんて初耳なんだが。

「まさか……お前が作ったのか？」

「そんな訳無いでしょうが。私が聞いた話では去年くらいから出来たらしいよ」

とりあえずリコが立ち上げたクラブで無くてほっとした。

「聞いたって誰がそんな余計なこと……。いや誰に聞いたんだ」

「まあ、いいから入りましょうよ。こんにちはー」

俺の質問は無視してリコは教室のドアを開けて、教室の中へと入っていった。教室の中はかなり殺風景で、教室の真ん中に四台パソコンがあるくらいで他には殆ど物がない。そのパソコンに一人の男が座っていた。

「……」

その男は無言でこちらを振り向くと立ち上がった。眼鏡をかけたかなりの長身の男で無表情で少々君が悪かった。

「ねえ。あんたがここの部員？」

「……部員ではない。わたしはここの管理人だ」

「管理人？」

「そうだ……。なんだパソコン部に用か？」

「そうだけど？ でも部員じゃないんでしょ」

「部員では無いが。パソコン部に用がある人間の案内をするようにという役目を負っている」

何かはわからないがかなり嫌な感じがする。俺の中の危険探知機が早々にこの場を立ち去れよと言っている。さすがのリコも呆気に取られているようだ。

「案内してくれるの。それで他の部員は？」

「ここだ」

「ここってパソコンしか見えないけど」

「パソコンの中だ」

俺とリコはパソコンの中を覗き込んだ。そこにはゲームの画面が映しだされていた。何人かのキャラクターが部屋のような場所にいるように見える。

「これってファイナルクエストでしょ」

「その通りです。よくご存知で」

「私たちもかなりやりこんだわよ。ね。弦人」

「ま、まあな」

リコはかなり自信満々に語っているが俺はかなり恥ずかしかったのでそっぽを向いて言った。

ちなみに『ファンタジークエスト』とはネットゲームの一つで有名どころのネットゲームよりは知名度は低いけど独自の路線を歩んでいる。従来からある戦士、魔法使い、牧師、弓師、槍師に加えてロボット、ナイト、Mob使い、薬師（やくし）、フェアリー、商人、幻術士、格闘家に加え、巫女が再実装され、今やファンタジーの殻を大きく破っている。裏では「カオスクエスト」などと揶揄されていたが、一部のユーザーからの熱狂的なまでの支援に支えられてなんとか運営している。

俺はリコに勧められていやいやプレーしていたのでこのゲームのことはよく知っていた。

「なら話は早いです。インして直接やりとりしてください。わたしもサポートをしますので」

管理人が慣れた手つきでキーボードを操作して「お客さんですよ」と打ち込む。俺たちも部室にあるパソコンをお借りして『ファンタジークエスト』にインした。ここからはネット上での会話になる。

管理人 こちらがお客さんです。部長。

ダンデライオン 僕がネトゲ部、部長のダンデライオンです。

りこりん 私はりこりんと申します。よろしく申し上げます。

ストリング 俺はストリングだ。よろしく。

ダンデライオン 入部希望ですか？

りこりん そうです。

ストリング いえ。見学です。

りこりん ちょっと。

ダンデライオン 構いませんよ。じっくり判断していただいて、それで入りたかったらどうぞ入ってください。

りこりん 少し、質問よろしいですか？

ダンデライオン どうぞ。

りこりん なぜ教室にいないのですか？

ダンデライオン ここは知っての通りネトゲ部です。主な活動場所はネット上となります。つまり教室にいてもいなくてもどちらでもいいのですよ。便宜上、部室は持ってはいませんがね。

りこりん では直接お会いすることはできないのですか？

ダンデライオン おそらくそうなるでしょう。だいたい会ってどうするつもりですか？ こうして十分会話もできるでしょう。

りこりん それはそうですが。何かおかしくありませんか？

ダンデライオン ネットではよくあることでしょう。顔も姿もわからない人間と意見を交わす。

それが当たり前だと思いますが。

管理人 ちなみにわたしも部長にはお会いしたことはありません。

りこりん そうなのですか。

ダンデライオン 管理人さんには僕がお願いして居てもらっています。部室に誰もいないと色々とうるさいですから。それでどうします？ 入部しますか？

りこりん どうする？ スリング。

ストリング どうするってなあ。もうちょっと考えてからでもいいんじゃないか？

りこりん ……。そうね。じゃあ、また来ます。

ダンデライオン お待ちしています。ただ一ついいですか？

りこりん なんですか？

ダンデライオン 入部するには条件が一つだけあります？

りこりん はい。

ダンデライオン 僕達の、いえ、このネトゲ部のチーム「蒲公英」に入ってもらうのが条件です。

りこりん はあ。それだけですか？

ダンデライオン それだけです。主な活動がチームでの活動になりますので入ってもらわ無いと色々と困りますので。

りこりん 確かにそうですね。ではまた来ます。

ダンデライオン お待ちしています。

ストリング 失礼しました。

『ファンタジークエスト』からログアウトすると管理人は紙を渡してきた。どうやら入部届けのようだ。

「一応、クラブという形を取っていますので入部を希望でしたら、こちらの紙に記入をお願いします」

「わかりました。よく考えてみますので。あの。ちょっといいですか？」

「なんでしょうか？」

「あなたが部長じゃないですよ？」

「私は管理人ですよ。それ以上でもそれ以下でもありません」

俺たちは管理人に挨拶してネトゲ部（パソコン部）を後にした。まさかこんな摩訶不思議なクラブが存在するなんて結局部員には一人も直接会うことができなかった。まあ確かに主な活動場所がネットなら会う必要はない。それで部活と言うのかどうかは甚だ疑問ではあるが。

「私、入部する。そして、絶対部長を見つけだすわ」

二人で家へと帰る道すがらリコはそんなことを言い出した。どうやらあのネトゲ部の十人と交流して何かよく無いスイッチが入ったようだ。

「やめとけて。すごい嫌な感じがするぞ。別にあれなら入部しなくてもいいだろ。会わないんだし」

「ううん。それじゃあ駄目。入部してあの部長と仲良くなって。それで部長をネットから引きずり出して見せる」

「何か違うような気がするが。まあ勝手にやれ。俺は今回、パスな。バイトもあるし部活なんてやってられん」

「何言ってるの。あんたも入るのよ。これは決定だから」

「アホか。そんな暇があるか。俺、金稼がなきゃなんねえし」

「私、前にも言ったよね。バイトすう暇があるなら狩りなさいって。忘れたとは言わせないわよ」

俺はもう付き合っていられないと思い、リコを置いて家へと駆け出した。後ろからリコの怒号が聞こえてきたが、無視することにした。しかし、ネトゲ部かまるでリコのために用意されたような部活だ。それにあの部長、確かに気になる。あそこにいる管理人とは一度も会ったことが無いと言っていた。リコにはああ言ったが心の中では少し惹かれている自分がいた。でも俺はそんなことをやっている立場ではない。少しでもリコ達に恩返しをするためにも働かなくてはいけないのだ。

第二話「リコとカコ」

東弦人の一日は新聞配達から始まる。慣れた手つきで新聞を配る。放課後にはファミレスでバイトをし、暇があればバイトばかりしている。彼は別にお金欲しい訳では無かったが、ただ家にいるだけということが耐えられないので、家にお金を入れるためにバイトをしている。

新聞配達を終え、家に戻ると髪の長い目付きの悪い女の子が二階から降りてきた。

「毎日。ご苦労様だな」

「……」

弦人は面倒な奴に見つかってしまったなと思い、気づかない振りを装い、通り抜けようとした。

「くおら！」

パン！

いきなり頭を引っぱたかれた。

「カコを無視するな」

「痛いな」

いきなり俺の頭を引っぱたいたこの女の子は、弦人の妹だ。中学生の癖に身長が百七十を超えており、兄の弦人よりもでかい。

「カコが呼んでいるというのに無視するとは何事だ」

「だからって蹴るなよ……」

「お前は目の前に邪魔な石ころが立ちはだかっていたら蹴り飛ばさないか。それと同じだ」

「俺は石ころかよ！」

弦人は思わず全力で突っ込んでしまった。

「で。何の用だ」

「いや。邪魔だからどけ。石ころよ」

「いつの間にか石ころ扱いに……」

「なんなの？ 朝からうるさいわね」

二階から姉のリコが気怠そうに降りてきた。俺とリコは同じ家に住んでいる。弦人とリコが姉弟だからだ。幼馴染みにして姉弟。意味が分からないかも知れないが本当の話だ。

弦人の小さい時に両親が亡くなってしまって、リコの親に俺が拾われた。それ以来、弦人はリコの家にお世話になっている。弦人とリコには、もちろん血の繋がりはない。つまり、妹のカコにも血の繋がりはないということになる。弦人はそれに対しては別に気にはしていないが歳が同じなのにリコの方が姉だということに苛立ちを持っていた。

弦人は必然的に一日中リコと一緒にということになる。家でも一緒に、クラスも一緒なのだ。（これで部活まで一緒になってしまったら俺の息が詰まる。それだけはどうしたって阻止しなくてはならない）

「それで決めた？」

「何を？」

学校にリコと一緒に歩いて登校している所で、弦人はリコに唐突にそんなことを言われた。

相変わらず主語のない奴だと弦人は思った。

「何って？ 部活」

「部活？」

「呆れた。もう忘れたの？」

「ああ。旅行部のことか」

「そうそう。どこに旅行に行くか。プランだけを建てて、実際は旅行にいかない謎の部活……って誰がそんなマイナーな部活に入るのよ！」

「帰宅部か」

「誰にも縛られない、何もするのも自由。これこそわたしの追い求めている部活……ってあんたわざとやってるでしょ」

「意外にノリいいのな……」

「まったく、ネトゲ部よ。ネトゲ部」

「ああ。わかってる。口に出したくなかったんだよ（ぼそ）」

「何！」

リコは弦人を殴る素振りを見せる。弦人は殴られないように瞬時にリコから距離を取った。

「いや。なんでも、それで入るのか？」

「うん。入るつもり、もちろんあんたもよ」

「なんで。俺まで。俺まで巻き込むな。それに知っていると思うが、俺にはバイトがある」

「そんなもの止めてしまいなさいよ。もともと意味ないし」

「意味ないか……。そうなのかもな」

「お父さんだって……。望んでない。だから入るよね」

「結局、そこに持って行きたいだけだろ」

「入らないなら、ここから飛び降りるから」

リコは橋に足をかけて飛び降りようとしている。弦人はいったいリコが何をしようとしているのかさっぱり分からなかった。

（困った奴だ。まったく……）

「お前。何やってんの？」

「わたし、本気だからね」

リコは橋の欄干に足をかけながら弦人に対して凄んだ。

「止めろよ。そんな子供みたいな真似」

「だったら入るよね？ ネットゲ部」

「それとこれとは別だろ」

「だったら……」

橋の欄干に足を乗せて今にも飛び降りそうにしている。弦人は溜息を付いて敗北を決めた。

「分かった……。俺の負けだ。入るよ。ネットゲ部に」

「ありがと。弦人」

リコは魅力的な笑顔を見せて、欄干から軽やかに降りる。弦人はリコに少々甘いなど思ったが、

ここで自分の意思を押し通しても、後で痛い目に合うことは昔からの付き合いで分かっているので、諦めることにした。

第三話「新メンバー」

リコに奇行に悩まされながらも何とか教室にたどり着いた。授業中だけが弦人にとって心休める時だ。なにせリコが関わってこないからだ。リコが関わってこないだけで、弦人にとってはつまらない授業も意味があるものに聞こえるのだ。

弦人はじっと考え込んでいた。リコがネトゲ部に入ることだ。なぜそこまでリコはゲームに固執するのか。昔からゲームは好きではあったがここまででは無かった。何かきっかけのようなものがあつたと思うがこの時の弦人には何も思いつかなかった。

「弦人。行くわよ」

「はい。はい」

放課後、弦人はリコに引っ張られてネトゲ部の部室に行った。自然とため息が出てしまうのはしょうがないだろう。

パソコン部の部室に入ると、中にはやはり無表情の管理人しかいなかった。この学校の関係者なのか、学生なのか、何もかも分からない人物だ。部室を見回したが、やはり部長の姿も他の部員もいないようだった。

「私達、二人入部することにしましたのでよろしくおねがいします」

リコは管理人に弦人と自分の分の入部届を出した。管理人は入部届にざっと目を通すと、一番奥の席の立派な机に入部届を置いた。あそこが部長の席なのだろうか。

「歓迎する。活動場所はネット上なので、部室には来ても来なくても構わない。細かい説明は部長がするので早速インしてくれ」

「は、はい」

弦人とリコは管理人の隣の席に座り、パソコンを立ち上げ、ファンタジークエストを起動させた。

ダンデライオン 入部ありがとうございます。心から歓迎いたします。

りこりん こちらこそよろしくおねがいします。

ストリング よろしくおねがいします。

ダンデライオン 早速ですが、僕のチーム『蒲公英』に入ってもらうことになりましたがよろしいですよ？

りこりん はい。もちろん。

ストリング お願いします。

ダンデライオン 僕からチーム参加の要請を出しますので、承諾してくださいね。

りこりん はい。

ストリング はい。

ダンデライオン はい。これで君たちは今から『蒲公英』の一員です。当面の目標としては三ヶ月後に行われるファンタジークエストのトーナメント出場を目標とします。

りこりん トーナメントですか？

ダンデライオン ええ。細かいことはまだ決まって無いようですが、今回は大手のスポンサーが付いて賞金も出るそうですよ。

ストリング 賞金ですか！

ダンデライオン はい。ですから今回のトーナメントに出るためにはメンバーが最低でも七人は必要です。今のところ、僕と管理人とりこりんさんとストリングさんの四人しかいませんので、メンバー集めを一緒に頑張りましょう。

ストリング 了解です！

ダンデライオン 信用ができて腕のたつ人です。頼みましたよ。僕は少し用事がありますのでこれで。

りこりん お疲れ様です。

ストリング お疲れ様です。

部長はそれだけ言ってログアウトしてしまった。弦人はど疑問があったので管理人さんに聞くことにした。

ストリング あの、なぜこのチームには人がいないんですか？

管理人 最近作ったチームなんです。部長は元、有名チームにいたんだが折り合いが付かなくて抜けてきまして、自分で新しくチームを結成したのですよ。

りこりん そうなんですか……。とにかく仲間集め頑張りましょう！

ストリング よし！ 今日中に七人見つけてみせるぜ！

その日は色々な手を使って仲間集めをしたが結局、一人も見つからなかった。

次の日の放課後、部長も交えてレベル上げも兼ねて仲間探しを開始した。首都から出て、外の狩場に出かけることにした。ちなみにダンデライオンは支援系のWIZで管理人は回復や蘇生などを得意とする牧師、ストリングは弓で攻撃する弓師で、りこりんは剣士だ。

ダンデライオン ここの狩場は少しレベルが高いですが、アイテムドロップもいいので今日はここでしばらく狩りましょう。

メイプル たすけて～

りこりん わかりました。

管理人 あまり離れずできるだけ固まって狩りましょう。

メイプル たすけてください～。

ストリング 何か聞こえますね。

今まさに狩りをしようとしている所にどこからともなく、助けてというログが流れてきた。見

ると、少し先の道の真ん中でWIZが倒れていた。

ダンデライオン 誰か死んでますね。管理人蘇生をお願いします。

管理人 了解しました。

ダンデライオンと管理人は慣れた感じで倒れているWIZに駆け寄り、蘇生のスキルを使ってWIZを生き返らせた。

メイプル ありがとー。ございますー。

ダンデライオン いえ。お気をつけて。

WIZはお礼を言って去っていった。慣れた所作ではあったが、よくこういったことはやっているのだろうか。

ダンデライオン そういえば僕たちのチームの目的を言ってませんでしたね。

ストリング 目的なんてあるんですか？

ダンデライオン ええ。あるですよ。ストリングさんはPKって知っていますか？

ストリング プレイヤーキルのことですか？

ダンデライオン ええ。通常、プレイヤーは モンスター MOB を狩るのですが、希にプレイヤーが他のプレイヤーを攻撃できる場合があります。普通は指定されたフィールドのみに限り、プレイヤー同士が攻撃しあえるのです。ただ、一年ほど前に現ゲームマスターの権限でPKが自由化になりまして、こういった野良PKが横行しているのですよ。僕たちはそういった人たちを手助けするような活動をしています。

ストリング つまり死んでいる人を生き返らせたりしているのですか？

ダンデライオン まあそういうことですね。

りこりん なんでそんなことしているのですか？

ダンデライオン まあそれは思う所があってやっているのですが、まあ今は狩りましょう。

ダンデライオンはりこりんの答えははぐらかして狩りを開始した。その日は、下校時間まで狩って終了となった。

次の日もストリングたちはチーム狩りをするために、同じ狩場に向うと、再び昨日のWIZが死んでいた。殆ど同じような場所だったので、弦人はものすごいデジャヴを感じた。

メイプル ありがとーございますー。

ダンデライオン あの。失礼だが、チームに所属していないのか？ 一人で行動するのは危険ですよ。

昨日の部長の言葉が気になって、家に帰ってネットで調べたのだが、現在、ファンタジークエストはPKが横行し、PK専門の山賊のようなチームがいるらしい。PKによって倒されたプレイヤーは所持金とアイテムを一つ奪われる。これもギルドマスター権限の一つだったようだ。現在のファンタジークエストではチーム行動が原則となっている。単体ではまず狙われるからだ。

メイプル はい。入れてくれる所がないので、一人で行動しているのものでー。

ストリング でしたらうちに入りませんか？ 今メンバー募集してるんですよ。

メイプル はい？

ダンデライオン 迷惑で無かったら、これも何かの縁だ。お願いできないだろうか？

メイプル んー。怖い人達じゃなさそうですし、いいですよー

りこりん やりましたね！

メイプル WIZのメイプルですー。よろしくですー

ストリング 自分で言うっておいてなんだが、いいのかよ！

ストリングは駄目もとで聞いてみたのだが、なんと成功してしまった。ちょっと抜けているような感じもするが、とにかく一人メンバーを集めることに成功した。残りは二人だ。

しばらくメイプルも交えて狩りをしていたのだが、下校時間になったのでログアウトして帰ることになった。

「あの。部長って部室には来ないのですか？」

「来ないというわけではありませんが、当分は来ないでしょうね？」

「管理人は部長に会ったことないんですよ？」

「いえ。最初はそのように部長に言われていましたのでそのように話しましたが、ありますよ。部長に会ったことは。といいますか私は部長とは昔からの知り合いですので」

「どんな人なんですか？」

「それは言えません。どうぞ、探してやってください。部長もこの生徒ですから。ではこれで」

そう言って去る管理人は軽く笑ったようにみえた。今まで無表情な姿しか見たことがなかったので意外だった。そのまま管理人は部室から出て行った。

「これもゲームの一部なのかしら」

「そうかもしれないな。ただどんな人なのかも分からないのにどうやって探すんだよ」

弦人はため息をついて今は不在の部長の席を見つめた。いったいどのような人物なのだろうか。